

「敬老の日豪雨」の後始末



熊手とスコップだけでは作業が進まず、レーキ、フォーク、それに一輪車に刈り払い機。やはり道具がないとはかどらない

9月の豪雨台風はこの農地に今までにない状況を生み出しました。刈り取った稲わらの浮遊です。

9月初旬に刈り取った早生品種の稲わらはコンバインのカッターで短く切り分けられ、土壌に戻してありました。ところが18日から降り出した雨、下流側の水位を押し上げて、たくさん稲わらをあちこちに運んでしまいました。

水位が下がりますと稲わらはその場

にとどまったり、流れに従って排水路に流れ込んでいました。

市道など日常的に使うところはすぐに処理が進みましたが、この時期に使わないところにあるものは、そのままになっていました。

農事組合法人八方原では処理を少しづつやろうとしておりましたが、この際環境を守る会の共同作業として実施することとしました。

ことに水路の中に堆積とどまった稲わらは深いところでは30センチメートル近くの量になっていました。その上に水分をしっかりと含んでおり、重量もあります。

農道に残ったものは土砂や雑草に絡みついたものがありました。こうした作業はある程度の人数がそろわないと、実施できません。それぞれが持ち寄った道具も活躍しました。最後には刈り払い機まで登場して絡みついている雑草を刈り取って処理しました。

秋の収穫時の浸水はそう多くはありません。梅雨時期の浸水は稲の生育に影響が出るのではないかとという心配が付きまといまいます。収穫前の稲も浸水は大敵です。しかし、収穫が済んでも様々な影響が出るのが良く分かりました。

季節による気象状況も数年前とはか

どうしてここで作るのですか



強い日差し学校から歩いてくるだけでも大変

9月30日、6月に田植えを見に来た上郷小学校2年生が、稲刈りを学びにやってきました。

杉山理事長が稲の話、その作業を見てやってくる「サギ」の話などをしました。児童からは、米粒の数がいくらかとか答えにくい質問もありました。

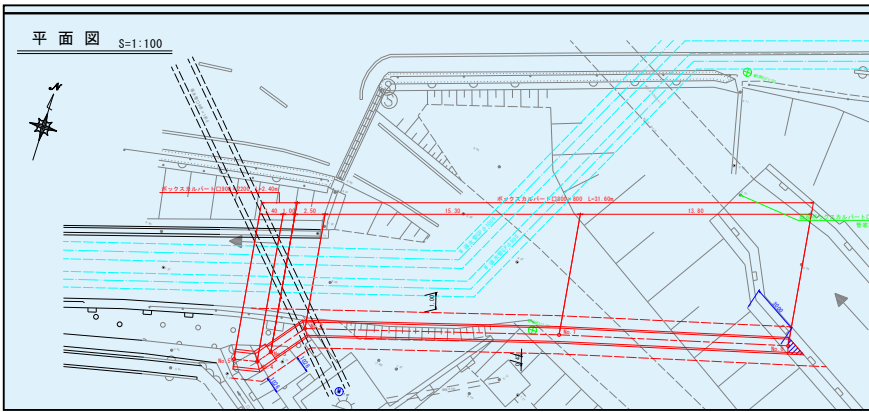
「なぜここで稲を作るのか」という質問がありました。この問いに答えられるのは誰もいないかもしれません。本当は私たち自身が考え続ける必要がある問いではないでしょうか。

なり違ってきました。従来は秋の長雨は日本の関東以北というのが多かったと思いますが、そうした過去の経験は用をなさないような、複雑な気象状況が続いています。

浸水対策工事の計画決定

昨年8月の防災会議から始まった八方原地区浸水対策が決定しました。

左の図面を参照してください。赤い線で引かれたものが今回作られる新たな水路です。その右端は九田川放水水路に面しています。堤体に長方形の排水



現在の揚水ポンプ小屋の側をかすめて九田川放水路に向けて水路が敷設

口が設けられます。排水口の高さは市道の最も低いところと同じに作られており、水位が市道の高さに達すると、その時点から下流側に緩やか流れていくようになっていきます。

従来は浸水が始まり、市道を水が覆うようになると、水路を仕切っているバルブを開けて農地の上流側から放水して水位を下げるようにしていました。今回の台風でも同様の対応をしてきました。しかし上流側から放水するために水路付近の稲はかなり打撃を受けていました。

今後は市道の冠水も相当な雨でも持ちこたえられるでしょう。その状態になつたら、仕切弁の開放で水位を下げる事が可能になると思われま

す。工事は既存の通路を通行止めにして掘削し、地中に水路を設けていくことになりま

す。西側放水路への合流地点は縦長のボックスに落ちるようになるので、一気に流れ込むというものではありません。工事は年内に始まり今年度内の完成を目指します。また榎野川本流の浚渫工事も11月ごろから着手されるよう

す。梅雨が来るたびに雨の様子に神経をとがらせているのが毎年のことでした。少しでも余裕が持てるようになると良いなと思っている方は、少なくともいでしょう。

麦作の優秀賞受賞

麦づくりの技術を高めるための組織「山口県麦作共励会」から、農事組合法人八方原が集団の部で「優秀賞」の栄冠を勝ち取りました。

麦は食料自給率の向上には欠かせない重要な作物と位置づけられており、目標の収量の確保が重要な課題となっています。

今回は品質や収量だけでなく組織としての活動も評価されたのでしよう。

おめでとございます。

お世話になりました神武さん

6班の神武（こうたけ）さんが当自治会から離れることになりました。こうたけと呼んでもらえないことでのトラブルや、インドネシアでの生活の様子など、たくさんのお話を残してくださいました。

台風14号 強い風の威力をまざまざと



堤防に沿って上から押し付けられたような形

9月中旬、台風14号は強い勢力のまま日本に接近してきました。18日の夜半、激しい風が吹き荒れました。

夜が明けて、雨が小康状態になると稲の様子も分かるようになりましたが、それほど被害を受けたようには見えませんでした。

どうやら東からの風だったので、元の地形が有利に働いたようです。ところがその風が、榎野川の堤防に当たるところで、はつきりと「つめあと」を残していました。